

Ⅲ 実践の内容

1 マネジメントサイクルを意識した年間スケジュール

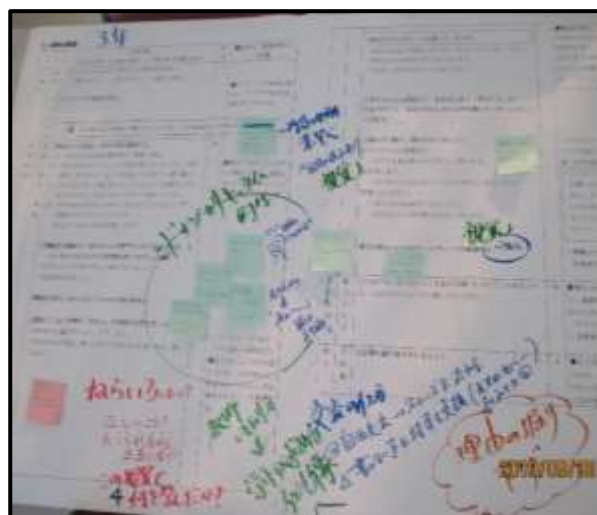
リサーチを加えたRPDCAマネジメントサイクル（前頁資料参照）を意識して、4・5月を「がっちりステージ（研修の基礎確立）」、6～9月を「こつこつステージ（授業の施行）」、10・11月を「ばっちりステージ（全校研の実施・日常授業の充実）」、12～2月を「ひろげるステージ（今日的課題についての修養）」、3月を「ふりかえりステージ（リフレクション）」として1年間の研究を組み立てている。

2 求める子ども像の設定とプロトタイプ授業の実施と検証

まず研究の出発点は、学年それぞれの実態を客観的資料と児童観察から設定し、プロトタイプ授業を考え、学年ごとに授業の実施と検証を行った。例えば、4学年では、「多様性を受け入れられる子」、6学年では、「自分の良いところに自信をもつ子」などと求める子ども像を設定した。また、それぞれの学年は4ないし5学級編制なので、同じ指導案をもとに学年相互に授業を見合い、毎回授業改善を行いながら、プロトタイプ授業を構築していった。

3 対話的事前・事後検討会の実施

授業案の検討や授業後の話し合いは、必ず6名程度の学年別グループで行い、活発な意見交換を行っている。毎回、右図のように指導案を模造紙サイズに拡大し、意見を書いた付箋紙（2種類の色別）を貼り、その意見をもとに導入場面から順に話し合いを深めていく。そして、その後、グループ代表と授業者とで対話を意識して授業を検討している。さらに、今後、学年で取り入れたいことを話し合い、個人のリフレクションシートに研修で「わかったこと（授業参観、対話の中での気づき）」と「わかったことの中で、自分の実践に生かしたいこと、試してみたいこと」を書き入れて終了となる。



4 その他の校内研修に関する工夫

授業案の事前検討会では、授業者による模擬授業形式を取り入れている。特に、初任者段階の教員にとっては、発問のしかたや授業の進め方が具体的にイメージできる。児童役の教員が想定外の意見を出したりするので、より授業者が題材に対して考え深めるきっかけになることもある。また、グループ代表と授業者で対話をするときには、研究部員からファシリテーターを置き、対話の中から、授業（案）のよい点や改善点を焦点化している。ファシリテーター役は、ベテランの研究部長がお手本を示しながら行うことが多いが、若手の人材育成を加味し、研究部の若手に託すこともある。とても刺激があり効果的である。



Ⅳ おわりに

本校は、児童数924名の大規模校である。そして、校内研修には、毎回40名以上が参加して行っている。しかしながら、このような研修形態で毎回研修会を行うことによって、本校のような大人数でも教職員のスキルアップを図る有効な研修スタイルになっている。これから求められる「主体的・対話的で深い学び」とは、このような授業スタイルなのではないかと本校の研修を通じ感じている。